

# 大学生における対人ストレスイベントと社会的スキル・対人方略の関連

橋 本 剛<sup>1</sup>

教育場面においても対人関係の否定的側面が精神的健康に及ぼす影響は重大な問題であると考えられる。本研究では(1)社会的スキルと対人ストレスイベント(ストレッサーとなり得る対人関係上の出来事)の関連、(2)対人方略(他者との関わり方/スタイル)と対人ストレスイベントの関連、(3)対人方略と社会的スキルの関連、を検討することを目的とした。分析対象は大学生計200名(男性105名,女性95名,平均年齢19.38歳)であった。分析の結果、社会的スキルは対人劣等とは負の関連を持つという仮説は支持されたが、対人摩耗とは正の相関を示すという仮説は必ずしも支持されなかった。また、社会的スキルの対人ストレス緩衝効果は示されず、部分的に直接効果が示された。対人方略と対人ストレスイベントの関連については、内省傾向が否定的影響力をもつことが確認された。対人方略と社会的スキルの関連については、対人関係の深化を回避する傾向が社会的スキルと負の関連を持つことが確認された。最後にこれらの知見を受けて、今後の課題などが議論された。

キーワード：対人ストレスイベント、社会的スキル、対人方略、精神的健康、大学生

## 問 題

近年のソーシャルサポートに関する研究においては、対人関係が個人の精神的/身体的健康の維持・促進に肯定的影響を及ぼすことが数多く指摘されている。しかし、対人関係は肯定的影響をもたらす反面、深刻なストレッサーとして否定的影響をもたらすこともある。青年期における対人ストレスと適応に関する諸研究においても、否定的影響の重要性が指摘されている(e.g., Compas, Orosan & Grant, 1993)。また、わが国の小学生高学年(長根, 1991)、中学生(岡安・嶋田・丹羽・森・矢富, 1992)、高校生(大迫, 1994)を対象としたストレス研究においても、対人関係がインパクトの大きいストレッサーとして、児童・生徒の精神的健康に否定的影響を及ぼすことが示されている。

現代青年が、こうした対人関係上の問題を生起させてしまう原因のひとつに、社会的スキルの欠如を挙げ論説がある(e.g., 磯貝, 1992; 松元, 1996)。しかし、こうした主張には実証的データに基づかない、主観的推測の域を出ないものも多い。そのため、現代青年の特性と社会的スキル、ならびに対人関係上の問題の関連を明らかにする実証的研究が必要である。社会的スキルが対人関係や精神的健康に及ぼす影響は、これまでにソーシャルサポート研究で扱われており(e.g., Cohen, Sherrod & Clark, 1986; 和田, 1991)、そこでは社会的スキ

ルがサポートの授受を促進することが見いだされている。ただし、これらはサポートという対人関係の肯定的側面と社会的スキルの関連を検討したのみである。すなわち、対人ストレスという対人関係の否定的側面と社会的スキルの関連は、先行研究では検討されていない。さらに最近では、対人関係の肯定的側面と否定的側面は、基本的には同次元ではないことが指摘されている(e.g., Barrera, Chassin & Rogosch, 1993; Finch, Okun, Barrera, Zautra & Reich, 1989)。したがって、サポートとスキルの関連が確かであるとしても、そのことが対人ストレスとスキルの関連まで確証しているわけではない。以上の点から、対人関係の否定的側面と社会的スキルの関連を検討することは重要な問題であると考えられる。そこで本研究では、社会的スキルと対人ストレスイベント(ストレッサーとなり得る対人関係上の出来事)の関連を検討することを第1の目的とする。具体的には、(1)対人ストレスイベントと社会的スキルの相関、(2)対人ストレスイベントが精神的健康に及ぼす悪影響を社会的スキルが緩和する可能性、という2点について検討する。この2点を検討するのは、個人の内的/外的資源は、ストレッサーとなりうるイベントの規定因であると同時に、ストレッサーのインパクトの媒介因としても考えられるからである(橋本, 1997a; Taylor & Aspinwall, 1996)。さらに、橋本(1997b)は、対人ストレスイベントの類型として、①対人葛藤(社会の規範から逸脱した顕在的な対人衝突事態)、②対人劣等(社会的スキルの欠如などにより劣等感を触発する事態)、③対人摩耗

<sup>1</sup> 日本学術振興会特別研究員・名古屋大学教育学部  
i45253a@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp

(対人関係を円滑に進めることに伴い気疲れを引き起こす事態)の3種類を見いだしている。これらのイベント毎の特徴と社会的スキルとの関連を推測すると、社会の規範からの逸脱である対人葛藤や、他者と対等にコミュニケーションが取れない事態である対人劣等は、社会的スキルの欠如から生じると考えられる。しかし対人摩擦は、対人関係を円滑に進めようとする意図にも拘わらず、気疲れを感じる事態である。つまり、対人摩擦とは、個人が社会的スキルを発揮しようとする意図を持ち、表面的には問題のない相互作用を実現・維持しているのだが、内心では気疲れを感じる事態である。よって、この事態はある程度の社会的スキルを保持していることによって生起するものであり、必ずしも社会的スキルの欠如によるものとは言えない。換言すれば、ある種の対人ストレスは、社会的スキルの保持によって生起するとも考えられる。また、社会的スキルの保持が、対人ストレスの種類を問わず、一様にその生起を抑制しうるのかも疑問である。それゆえ、社会的スキルと対人ストレスの関連については、対人ストレスの各類型を考慮した検討が必要であろう。

ところで、対人ストレスや社会的スキルと関連するであろう現代青年の世代の特徴を検討するには、コホート分析に限らずとも、青年心理学における現代青年の特徴研究や、社会学的研究における現代若者論を援用することも可能である。前者として例えば岡田(1996)は、疾風怒涛的な従来の青年像に合致する群の対人恐怖的傾向が高い一方で、群れ志向群は適応的特徴を示すことを明らかにしている。また後者の例として岩間(1995)は、仲間からの評価懸念は残ったままマニュアル文化や差異化文化が衰退した90年代では、「自分の感覚のみを頼りにして、人の目を気にするのはやめよう」という方略を選択する若者が多いことを指摘している。橋本(1997c)は、これらの論説を概観した上で女子学生を対象とした面接を行い、時代的・社会文化的背景が、青年の対人関係とそれに起因するストレスとの関連に及ぼす影響を検討した。その結果、①現代青年においては、対人葛藤よりも対人劣等や対人摩擦の方が中心の問題である可能性、②価値観の差異が導く深化回避傾向によって、サポートネットワークが量的には十分でも質的には不十分である可能性、③既存の社会的スキル研究では扱われていない、現代青年特有のスキルが存在する可能性、が示唆された。そこで本研究では、現代青年の他者との関わり方/スタイル(本研究では対人方略と総称する)を取り上げ、対人方略と対人ストレスイベントとの関連、および対人方略と社会的

スキルとの関連を検討することを、第2・第3の目的とする。対人ストレスイベントと対人方略との関連については、現代青年の摩擦回避傾向や「やさしさ」に関する議論(e.g., 藤竹, 1994; 大平, 1995; 千石, 1994)から、対人葛藤回避傾向の強さ、評価懸念による劣等感の高さ、価値観の多様化による対人摩擦の増加など、さまざまな可能性が推測される。また、青年の対人関係と適応に関する議論では、これまでいくつかの研究で類型化が行われており(岩間, 1995; 岡田, 1993; 上野・上瀬・松井・福富, 1994)、類型毎の適応度についての議論が展開されている。そこで本研究でも、どのような類型、もしくはどのような特徴が、対人ストレスイベントの諸側面と関連するのかを検討する。次に、社会的スキルと対人方略の関連についてであるが、従来は青年期の友人関係の発達の意義のひとつとして社会的スキルの学習が挙げられている(松井, 1990)。しかし、先述した「現代青年の社会的スキルの欠如」という指摘が適切ならば、友人関係がスキル学習の場として機能しているのか疑問である。すなわち、学ぶべきスキルが欠如しているならば、青年期の友人関係は社会的スキル学習の場として機能しなくなっているかもしれない。もちろんその一方で、青年期の友人関係がスキル習得の場として今日も十分に機能している可能性や、青年期の友人関係で習得する社会的スキルが通状況的なものではなく、故に欠如しているように感じられるという可能性も考えられるが、いずれにせよその背景には、現代青年が持つ対人方略の独自性があると考えられる。

現代青年の対人方略に関する研究として岡田(1991)は、現代青年の特徴として「対人関係の希薄化」と「内省の減少」を挙げ、さらにそれぞれに対応する尺度として「友人関係(の深さに関する)尺度」と「自分の内面への関心尺度(内省傾向に関する尺度)」を作成している。本研究では、これらの尺度を対人方略の尺度として使用する。ただし先述したように、対人方略とは他者との関わり方/スタイルの総称的概念であり、これら2つの尺度は対人方略の下位概念の一部であるとする立場を筆者はとっている。本研究における対人方略という概念の使用は、現代青年の対人関係の特徴を描写しているさまざまな概念がすべて「他者との関わり方/人付き合いのスタイル」に関する概念である点に着目したものであり、「対人方略」という語はそれらを包括する上位概念として便宜上用いられるものである。その中でも岡田(1991)の尺度を利用したのは、これらの尺度が種々の現代青年に関する議論を考慮した上で作

成されたものであり、本研究の主題を検討するには、最も適していると考えられたからである。

以上から、第1の研究目的である社会的スキルと対人ストレスイベントの関連については、以下の2つの仮説を検証する；①社会的スキルは、対人ストレスイベントが精神的健康に及ぼす否定的影響を緩和する；②社会的スキルは対人葛藤・対人劣等とは負の関連を持ち、対人摩擦とは正の関連を示す。さらに、第2・第3の研究目的である、対人方略と対人ストレスイベントおよび社会的スキルの関連については、仮説は設けないが探索的に検討する。

## 方 法

調査は1997年1月および1998年5月に、国立4年制大学の大学生を対象に実施し、質問紙に不備のなかった者200名(男性105名, 女性95名, 平均年齢19.38歳)を分析対象とした。本研究の分析では以下の尺度を使用した。①KiSS-18: 社会的スキルを測定する尺度。青年の全般的社会的スキルを測定することを意図して菊池(1988)によって作成された18項目, 5段階評定。その妥当性については、菊池(1998)を参照のこと。②内省傾向に関する尺度(以下内省尺度): 岡田(1991;1993)で用いられた11項目, 7段階評定。③友人関係の深さに関する尺度(以下友人尺度): 同じく岡田(1991;1993)で用いられた12項目, 7段階評定。④対人ストレスイベント尺度: 橋本(1997b)による。対人関係においてストレスを生じさせるイベント30項目について、各項目内容が最近3カ月間にどの程度の頻度で起こったかを、「全くなかった」から「しばしばあった」までの4段階で評定を求めた。⑤GHQ28: 全般的健康度の指標として設定された中川・大坊(1985)による28項目, 4段階評定。点数が高いほどディストレス傾向が強い(精神的に不健康である)ことを示す。なお、今回使用された対人ストレスならびに対人方略の尺度の項目例をTABLE 1に示す。

## 結 果

### 1. 尺度の構成

尺度の構成はすべて、原典の尺度構成を採用した際の信頼性係数を確認し、信頼性が不十分であると判断された場合のみ、再構成を行った。その結果、まずKiSS-18については合計点をKiSS-18得点とした。内省尺度については、因子分析ならびに項目尺度相関の結果から信頼性が確認されたので、岡田(1993)による下位尺度(「内省傾向」と「軽薄短小」)をそのまま採用した。また、友人尺度については、岡田(1993)による下

TABLE 1 尺度の項目例

対人ストレスイベント (対人関係でストレスを生じさせるイベント)	
対人葛藤	「知人とけんかした」
(8項目)	「知人に無理な要求をされた」 「知人と意見が食い違った」
対人劣等	「会話中、何をしゃべったらいいのかわからなくなった」
(9項目)	「知人とどのようにつきあえばいいのかわからなくなった」 「知人が自分のことをどう思っているのか気になった」
対人摩擦	「自慢話や愚痴など、聞きたくないことを聞かされた」
(7項目)	「無理に相手に合わせた会話をした」 「あまり親しくない人と会話をした」
対人方略(青年の他者との関わり方/スタイル)	
内省傾向	「ものごとを深く考える傾向がある」
(7項目)	「自分がどんな人間なのか関心がある」 「自分が何の為に生きているのか考え込んだことがある」
軽薄短小	「軽く生きていく主義だ」
(4項目)	「軽い生き方をするようにしている」 「今さえ楽しければよいと思う」
深化回避	「友達と真剣に議論するのは恥ずかしいことだ」
(6項目)	「友達には自分の本心は見せない」 「友達と精神的に深い関係を持ちたい」(逆転項目)
気遣い	「友達を傷つけないように注意を払っている」
(3項目)	「友達と楽しい雰囲気になるよう気を使っている」 「友達からどう思われるか気になる」

位尺度を採用した場合の信頼性係数が十分でなかったため、因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行い、固有値の減衰状況と解釈可能性から2因子を抽出した。また、それぞれの因子で負荷が.4以上の項目を下位尺度項目としたところ、深化回避と気遣いの下位尺度が構成された。本研究では、内省尺度と友人尺度から導かれた4下位尺度を対人方略の尺度として使用する。対人ストレスイベント(以下対人ストレスと略記)については、合計点を対人ストレス得点とし、さらに橋本(1997b)による下位尺度(対人葛藤8項目, 対人劣等9項目, 対人摩擦7項目)を採用した<sup>2</sup>。なお、下位尺度については合計点を項目数で割っているため得点範囲は1~4点となる。GHQ28については、合計点をGHQ得点とした。

以上の尺度についてt検定により性差を検討したところ、深化回避で男性が高得点という有意差、対人摩擦とKiSS-18で女性が高得点という傾向差がみられたが、その他の尺度について性差は認められなかった。したがって、性差が及ぼす全般的な影響は小さいと考えられるので、以下の分析では性差は扱わない。尺度の平均、標準偏差、 $\alpha$ 係数ならびに性差をTABLE 2に示す。また対人ストレスに関しては、対人葛藤は対人劣等・対人摩擦よりも頻度が低いという橋本(1997b)と同様の傾向が確認された。

<sup>2</sup> ただし、項目23番「同じことを何度も言われた」は橋本(1997b)では対人葛藤項目とされているが、対人葛藤尺度に含んだ場合の項目尺度相関が低く、対人摩擦尺度に含んだ場合の項目尺度相関が高かったため、表面的妥当性も考慮して、本研究では対人摩擦項目として扱った。

TABLE 2 尺度の平均値・標準偏差・α係数および性差

尺度	M	SD	α	男性 M	女性 M
対人ストレス	62.53	12.93	.91	61.41	63.76
対人葛藤	1.78	0.55	.86	1.79	1.78
対人劣等	2.39	0.55	.81	2.35	2.44
対人摩耗	2.15	0.49	.71	2.09	2.22†
KiSS-18	54.39	10.22	.88	53.43	55.44†
内省傾向	28.56	7.29	.79	28.70	28.40
軽薄短小	8.72	5.10	.84	8.90	8.52
深化回避	13.44	5.96	.78	14.57	12.19**
気遣い	12.17	2.71	.65	12.07	12.28
GHQ	56.35	12.50	.91	56.26	56.44

\*\* :  $p < .01$  † :  $p < .10$

N = 200 (M = 105, F = 95)

## 2. 対人ストレスイベント・精神的健康と社会的スキルの関連

対人ストレスと社会的スキルの相関を求めた結果 (TABLE 3), 対人劣等と社会的スキルの間に高い負の相関が見いだされたが, 対人葛藤と対人摩耗は社会的スキルと無相関であった。さらに社会的スキルと GHQ の間にも 1%水準で有意な負の相関が見いだされたが, その値は対人ストレスと GHQ の相関に比して小さいものであった。したがって, 社会的スキルは対人劣等の頻度と密接な関連がある一方で, 対人葛藤や対人摩耗の生起頻度とは無関連であること, 社会的スキルと精神的健康との直接的な関連は, 対人ストレスと精神的健康との関連よりは弱いことが示された。

TABLE 3 対人ストレスイベント・GHQ と KiSS-18 の尺度間相関

尺度	KiSS-18	GHQ
対人ストレス	-.26**	.46***
対人葛藤	-.12	.39***
対人劣等	-.40***	.45***
対人摩耗	-.03	.28***
GHQ	-.19**	—

\*\*\* :  $p < .001$  \*\* :  $p < .01$

さらに, 社会的スキルのストレス緩衝効果を検討するため, KiSS-18得点および対人ストレス得点を平均値で高群と低群に分け, これらを独立変数, GHQ 得点を従属変数とした 2 要因分散分析を行った。その結果, 対人ストレスは主効果を示した ( $F(1,196)=27.51, p < .001$ ) もの, KiSS-18の主効果 ( $F(1,196)=.15, ns$ ) と交互作用 ( $F(1,196)=.43, ns$ ) は認められなかった。さらに, 対人ストレスをその下位尺度で代替した分散分析も行ったが, いずれも下位尺度の主効果が示された一方で, KiSS-18の主効果ならびに交互作用は認められなかった。ただし, KiSS-18の上位30%を高群, 下位30%を低群とした 2 要因分散分析では, 交互作用は見いだされなかったものの, 対人ストレス ( $F(1,119)=19.49, p < .001$ )

に加えて, KiSS-18 ( $F(1,119)=6.84, p < .01$ ) の主効果が見いだされた (FIGURE 1)。したがって, 社会的スキルが対人ストレスイベントのインパクトを緩和するという仮説は緩衝効果という意味では支持されなかったが, 部

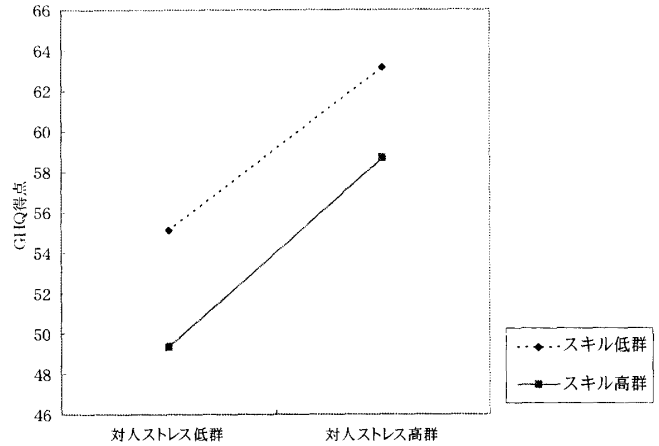


FIGURE 1 対人ストレスと KiSS-18による分散分析

分的には直接効果が示された。

## 3. 対人ストレスイベントと対人方略の関連

まず対人方略 4 尺度と対人ストレスイベントとの相関を求めたところ (TABLE 4), 対人劣等が内省傾向・深化回避・気遣いと有意な正の相関を示し, 内省傾向は対人葛藤とも, 気遣いは対人摩耗とも正の相関を示した。ちなみに対人方略と GHQ の相関も求めたところ, 内省傾向のみが GHQ と高い正の相関を示した。

TABLE 4 対人方略に関する尺度間相関

尺度	内省傾向	軽薄短小	深化回避	気遣い
軽薄短小	-.25***	—		
深化回避	-.11	.23**	—	
気遣い	.38***	.05	-.02	—
対人ストレス	.30***	-.04	.09	.27***
対人葛藤	.18*	-.01	.05	.12
対人劣等	.41***	-.11	.19**	.37***
対人摩耗	.13	.09	-.02	.19**
GHQ	.39***	-.10	.03	.06
KiSS-18	-.06	-.08	-.48***	-.06

\*\*\* :  $p < .001$  \*\* :  $p < .01$  \* :  $p < .05$

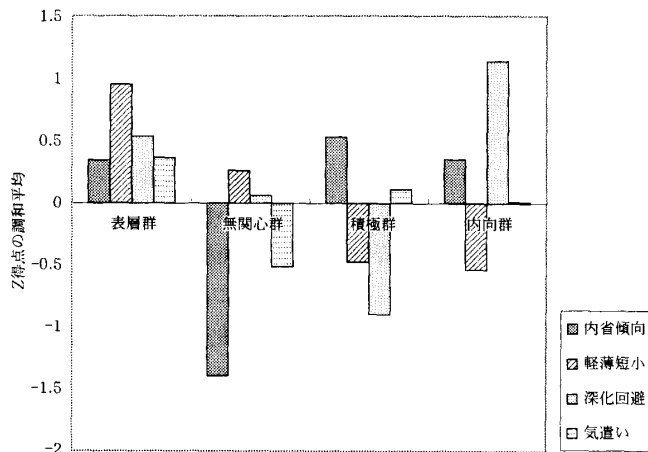
ところで, 先述の岡田 (1993) では現代青年の類型化が行われ, 類型による対人恐怖的心性の差異が示唆されている。そこで本研究もこれと同様に, 内省尺度と友人尺度でクラスター分析 (SPSS による Quick Cluster) を行い, 得られた 4 クラスターを独立変数とする 1 要因分散分析によって, クラスター間の対人ストレスを比較検討することを試みた (TABLE 5)。まず構成された各クラスターの特徴を内省尺度および友人尺度から検討する (TABLE 5, FIGURE 2)。第 1 クラスターは, 軽薄

**TABLE 5** 内省傾向と友人関係に関する尺度による各クラスターの平均

尺度\クラスター	第1クラスター 表層群(N=43)	第2クラスター 無関心群(N=48)	第3クラスター 積極群(N=74)	第4クラスター 内向群(N=35)
内省傾向	31.09b	18.45a	32.42b	31.14b
軽薄短小	13.58c	10.06b	6.31a	6.00a
深化回避	16.63c	13.81b	8.14a	20.23d
気遣い	13.16b	10.79a	12.47b	12.20ab
対人ストレス	66.60b	57.35a	62.77ab	64.09ab
対人葛藤	1.87	1.67	1.79	1.80
対人劣等	2.58b	2.09a	2.38ab	2.59b
対人摩擦	2.31	2.04	2.16	2.09
GHQ	59.28b	50.77a	58.28b	56.29ab
KiSS-18	50.37a	54.92ab	58.66b	49.54a

Note:異なるアルファベットのみがある群間は5%水準で有意(同じアルファベットがある群間は有意差なしアルファベットのない群はその他いずれの群とも有意差なし)  
数値は調和平均

短小の高さが顕著である。また、深化回避傾向も高めで、軽く浅い対人関係を志向する群であると考えられるので、「表層群」と命名する。第2クラスターは内省傾向および気遣いが低いのが顕著な特徴である。つまり自己も他者もあまり省みない群であると考えられ、「無関心群」と命名する。第3クラスターと第4クラスターはともに内省傾向が平均的、軽薄短小が低得点という共通点がある。ただし、深化回避傾向における第3クラスターの低さと第4クラスターの高さが特徴的な差異であろう。このことから、第3クラスターは、内省傾向と関係深化志向が両立している、つまり自己にも他者にも積極的に関与する群であると考えられるので、「積極群」と命名する。一方第4クラスターは、内省傾向が高い一方で関係深化を回避する、いわば自己には積極的だが他者には消極的な群であると考えられるので、「内向群」と命名する。これらの類型は岡田(1993)とは異なるものとなったが、簡潔に言えば対人関



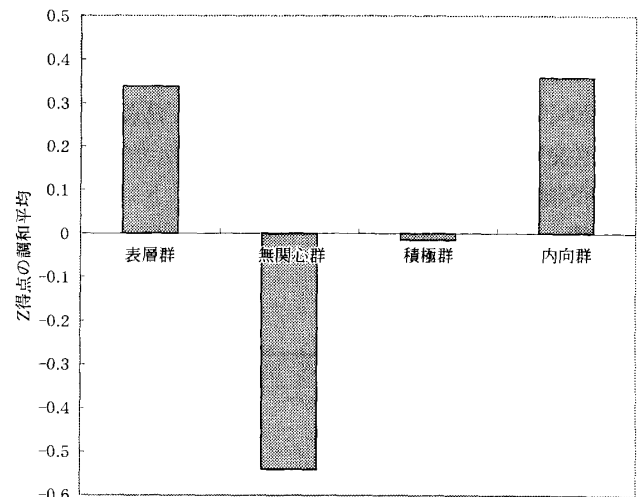
**FIGURE 2** 各クラスターの対人方略得点

係において、軽い関係の維持を望むか(第1クラスター)、何も望んでいないか(第2クラスター)、自身と対人関係をともに深めることを望むか(第3クラスター)、対人関係に期待せず自身を深めることを望むか(第4クラスター)、という区分であると考えられよう。ちなみに $\chi^2$ 検定で性による偏りを検討したところ、有意な偏りは見いだされなかった。

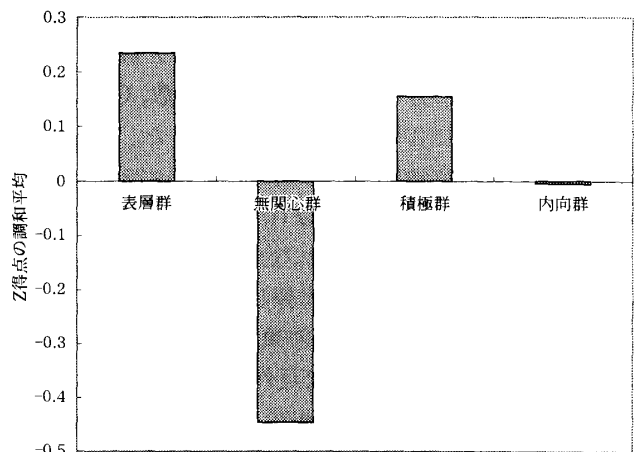
これらのクラスター間における対人ストレスイベントの平均値の差を分散分析で検討したところ、対人劣等のみであるが、無関心群の低得点が示された(TABLE 5, FIGURE 3)。さらにGHQについても、無関心群の得点の低さが示された(TABLE 5, FIGURE 4)。以上から、対人方略と対人ストレス、そして精神的健康との関連については、内省傾向の高さが否定的に働く傾向が示されたと考えられよう。

**4. 対人方略と社会的スキルとの関連**

まず対人方略と社会的スキルとの相関を求めた結果



**FIGURE 3** 各クラスターの対人劣等得点



**FIGURE 4** 各クラスターのGHQ得点

(TABLE 4), 深化回避のみが高い負の相関を持つことが確認された。さらに, 先述のクラスター間でも社会的スキル得点にいずれも有意差がみられ (TABLE 5, FIGURE 5), 第1クラスター(表層群)と第4クラスター(内向群)が低得点, 第3クラスター(積極群)が高得点であった。以上から, 対人方略と社会的スキルの関連については, 相関・クラスター間の比較とともに, 深化回避傾向が社会的スキルと負の関連を持つことが確認された。

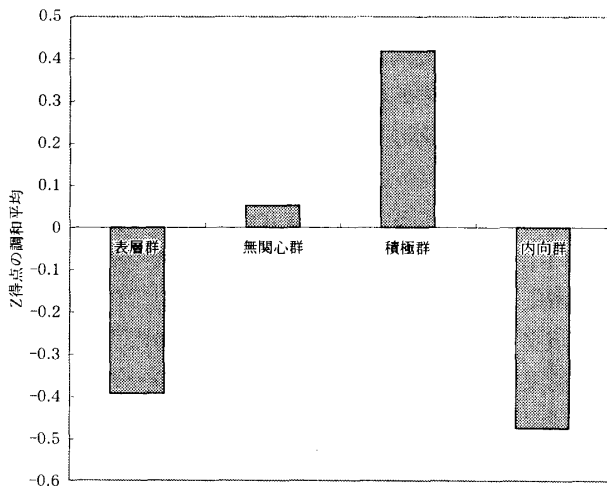


FIGURE 5 各クラスターの KiSS-18得点

## 考 察

### 1. 対人ストレスイベント・精神的健康と社会的スキルの関連

まず対人ストレスイベントと社会的スキルの関連では, 社会的スキルが対人劣等との間で高い有意な負の相関を示した一方で, 対人葛藤・対人摩擦とは無相関であった。したがって, 社会的スキルは対人劣等とは負の相関を示すという仮説は支持されたが, 社会的スキルが対人葛藤と負の相関, 対人摩擦と正の相関を示すという仮説は支持されなかった。この結果は, 社会的スキルの保持が時には対人ストレスを促すという仮説を棄却するものであるが, それと同時に, 少なくとも本研究における社会的スキルが, すべての否定的対人関係に対して, その抑制に有効であるわけではないことも意味している。否定的対人関係の類型に関する研究で, 例えば対人葛藤研究では, 葛藤の相互作用の類型として, (1)肯定的な感情や思考の妨害, と(2)期待された支持の不提供, という分類がある (Kelley, 1987)。また, ソーシャルサポート研究の文脈では, 否定的対人相互作用の類型として, (1)社会的葛藤(望まない行動を強いられるような他者からの圧力), と(2)対人妨害(他者による個人の目標達成阻害), という分類がある (Shinn,

Lehmann & Wong, 1984)。これらはともに, 否定的対人関係には(1)個人が望まない相互作用に従事している状況, と(2)個人が望む相互作用を実現できない状況, という2つがあるという点で一致している。そしてこれまでの社会的スキル研究は, そこで扱う問題として引込み思案・対人不安・孤独感など, 「個人が望む対人関係が実現できない状態」を取り上げることが多かった (e.g., 相川・津村, 1996)。本研究の結果は, そのような問題への社会的スキルの有効性ととともに, 「個人が望まない対人関係に従事している状態」への非有効性を示しているとも考えられる。橋本(1997c)は現代青年に特有のスキルの存在可能性を示唆しているが, 一般的な社会的スキルに加えて, 今後は問題特定の社会的スキルの検討も課題とすべきであろう。

また, 社会的スキルと GHQ の関連については, 相関は有意だったものの決して高くはない。さらに分散分析でも, 社会的スキルが対人ストレスイベントのインパクトを緩和するという緩衝効果は支持されなかった。これらの結果から, 社会的スキルが精神的健康に直接的に及ぼす影響は, 決して大きくはないと考えられる。しかし部分的には直接効果が示され, 数少ない介入可能性のある変数という意味でも, 社会的スキルはやはり今後もさらに検討すべき概念であろう。

### 2. 対人ストレスイベントと対人方略の関連

次に対人方略尺度と対人ストレスイベント尺度の関連では, 内省傾向・気遣いが対人ストレスと正の相関を示した。特に気遣いが対人摩擦と有意な相関を示したのは, 対人摩擦の構成概念妥当性を支持する結果であると考えられよう。さらにクラスター間の平均値の比較では, 対人ストレス・GHQ とともに, 無関心群が肯定的, 表層群が否定的な傾向にあることが見いだされた。本研究で疾風怒濤に該当するのが積極群, 群れ志向に該当するのが表層群であると考えれば, 疾風怒濤的な群が不適応的であり, 群れ志向群が適応的であるという岡田(1996)の指摘とは必ずしも合致しない。この原因として, 本研究では岡田(1993; 1996)で想定されていない無関心群が想定され, その群の適応的な結果が, 相対的に他の群の不適応的な結果を導いたと考えられる。しかし上野ら(1994)では, 心理的な距離が大きく同調傾向が高い表面的交友は, 劣等感が高いことが示されている。本研究における表層群の不適応傾向は, この知見と合致するものであると考えられる。そしてクラスター間の GHQ の違いは, 表層的か否かを問わず対人関係に気を使う表層群・積極群より, 対人関係にあまりコミットしない無関心群・内向

群の方が、相対的に適応的であることを意味している。前述した青年論や若者論においては、青年の対人方略の時代的変遷として、自分も対人関係も高めようとする積極群は70年代までの、軽い人間関係を志向する表層群は80年代の典型的なスタイルであるとされている。それに対して、自分の興味にしか関心を示さないオタク的な内向群・考えるのをやめてしまった無関心群は、90年代の典型的なスタイルであることが指摘されている。よってこの結果は、他者へのコミットの低減という現代青年の特徴が、現代社会への適応方略として採用されたという可能性を示唆しているのかもしれない。ただし、自己も他者も省みない群が最も適応的であることの是非については後述する。また、クラスター間で対人葛藤や対人摩擦に差がみられなかったことは、これらのイベント生起における対人方略の影響を否定するものである。したがって対人ストレスの生起は、イベントの種類によっては対人方略以外の要因に規定されたと考えられ、この点は今後の検討課題である。

### 3. 対人方略と社会的スキルとの関連

対人方略と社会的スキルとの関連については、深化回避が高い負の相関を示した。ここから、対人関係を深化させないのは個人が主体的に望んでいるわけではなく、スキルの欠如に由来する可能性が考えられる。その意味では、この結果は、現代青年の対人関係上の問題はスキル欠如に由来するという多くの指摘を支持していると言えよう。また、クラスター間の社会的スキルの比較では、表層群と内向群のスキルの低さが見いだされた。この結果も深化回避志向の影響を反映していると考えられ、表層群は決して積極的に表層的な関係を志向しているのではなく、実は消極的に表層的な関係を受容せざるを得ない状況にあるという可能性が考えられる。つまり、この群は無関心群ほど対人関係に淡泊なわけではなく、しかし積極群ほどのスキルを持っていないが故に、表層的対人関係で満足せざるを得ないということである。ただし、これはあくまでひとつの類推的な考え方であり、より詳細な検討が必要であろう。

### 4. 今後の課題

本研究では対人方略から表層群、無関心群、積極群、内向群の4類型が形成された。そしてその他3群と比較して、無関心群は対人ストレス・精神的健康という側面における適応のよさが顕著であった。しかしこの群にも、客観的な社会的適応という点で問題が内包されている可能性がある。というのは、無関心群は自己も対人関係も省みない群である。内省もせず他者評

価も気にしなければ対人関係の悩みもなく、個人内のストレスは低い水準で維持されるであろう。しかしこのような対人方略が他者にとっては傍若無人に映る可能性は十分に考えられる。つまり、この群は個人内の心理的過程では適応的ではあるが、社会適応の客観性という観点からは、必ずしも適応的ではない可能性が考えられるのである。よって、無関心群を適応的とするのにも疑問は残り、客観的指標に基づいた研究も行われるべきであろう。

本論文は(1)「現代青年はスキルが低下している」から(2)「スキルの欠如によって対人関係の問題が生じやすい」という指摘の是非を問うことが根本的な目的であったが、今回見いだされた知見は必ずしもこの指摘を全面的に支持するものではなかった。まず(1)の指摘については、深化回避が現代青年の特徴であるならば、この考えは支持されたと言えよう。かつての疾風怒濤群に該当するであろう、積極群のスキル得点の高さもこれを支持するものである。しかしその一方で、同じく現代に特徴的とされる無関心群のスキル得点は、決して低くはなかった。これは今回の尺度が自己評価形式だったことに基づくとも考えられるが、この結果は(1)の指摘を支持するものではない。よって、「現代青年のスキルの低下」は基本的には支持されたが、部分的には疑問も残ると言えよう。次に(2)の指摘については、対人劣等とスキルが負の相関を示した一方で、対人葛藤・対人摩擦はスキルと相関を示さなかった。したがって「スキルの欠如による問題の生起」は部分的な支持に留まったと言えよう。今日顕在化している青年の対人関係上の諸問題が果たしてスキル欠如に基づくのか、そしてそれぞれの問題の抑制・早期解決にはどのようなスキルが有効なのか、残された検討課題は少なくない。今後は調査対象・問題の内容・そしてスキルの内容それぞれを何らかの形で分類した上で、それらの詳細な対応関係を検討することが望まれよう。

### 引用文献

- 相川 充・津村俊充(編) 1996 社会的スキルと対人関係：自己表現を援助する 誠信書房
- Barrera, M., Jr., Chassin, L., & Rogosch, F. 1993 Effects of social support and conflict on adolescent children of alcoholic and nonalcoholic fathers. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64, 602-612.
- Cohen, S., Sherrod, D.R., & Clark, M.S. 1986 Social skills and the stress protective role of

- social support. *Journal of Personality and Social Psychology*, **50**, 963—973.
- Compas, B.E., Orosan, P.G., & Grant, K.E. 1993 Adolescent stress and coping : Implications for psychopathology during adolescence. *Journal of Adolescence*, **16**, 331—349.
- Finch, J.F., Okun, M.A., Barrera, M., Jr., Zautra, A. J., & Reich, J.W. 1989 Positive and negative social ties among older adults : Measurement models and the prediction of psychological distress and well-being. *American Journal of Community Psychology*, **17**, 585—605.
- 藤竹 暁 1994 若者にとって幸せとは—満足社会のゆくえ— 有斐閣
- 橋本 剛 1997a 対人関係が精神的健康に及ぼす影響—対人ストレス生起過程因果モデルの観点から— 実験社会心理学研究, **37**, 50—64.
- 橋本 剛 1997b 大学生における対人ストレスイベント分類の試み 社会心理学研究, **13**, 64—75.
- 橋本 剛 1997c 現代青年の対人関係についての探索的研究—女子学生の面接データから— 名古屋大学教育学部紀要(心理学), **44**, 207—219.
- 磯貝芳郎 1992 今ふうの友だちづきあい—進行する人間関係の稀薄化— 磯貝芳郎(編) 上手な自己表現—豊かな人間関係を育むために— 有斐閣選書 Pp.1—22.
- 岩間夏樹 1995 戦後若者文化の光芒—団塊・新人類・団塊ジュニアの軌跡— 日本経済新聞社
- Kelley, H.H. 1987 Toward a taxonomy of interpersonal conflict processes. In S. Oskamp & S. Spacapan (Eds.), *Interpersonal processes*. Newbury Park, CA : Sage Publications, Inc. Pp.122—147.
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 菊池章夫 1998 また／思いやりを科学する—向社会的行動の心理とスキル— 川島書店
- 松井 豊 1990 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫(編) 社会化の心理学ハンドブック 川島書店, Pp.283—296.
- 松元泰儀 1996 人間関係のつまづきと病理 斎藤誠一(編) 人間関係の発達心理学 4 青年期の人間関係 培風館 Pp.135—167.
- 長根光男 1991 学校生活における児童の心理的ストレスの分析—小学4, 5, 6年生を対象にして— 教育心理学研究, **39**, 182—185.
- 中川泰彬・大坊郁夫 1985 日本語版G H Q精神健康調査表手引 日本文化科学社
- 大平 健 1995 やさしさの精神病理 岩波新書
- 大迫秀樹 1994 高校生のストレス対処行動の状況による多様性とその有効性 健康心理学研究, **7**, 26—34.
- 岡田 努 1991 現代青年の人格発達と対人関係に関する探索的研究 東京都立大学心理学研究, **1**, 11—18.
- 岡田 努 1993 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係 発達心理学研究, **4**, 162—170.
- 岡田 努 1996 現代青年は本当に変わってしまったのか—友人関係を中心として— 日本青年心理学会第4回大会発表論文集, 49—50.
- 岡安孝弘・嶋田洋徳・丹羽洋子・森 俊夫・矢富直美 1992 中学生の学校ストレスの評価とストレス反応との関係 心理学研究, **63**, 310—318.
- 千石 保 1994 マサツ回避の世代—若者のホンネと主張— PHP 研究所
- Shinn, M., Lehmann, S., & Wong, N.W. 1984 Social interaction and social support. *Journal of Social Issues*, **40**, 55—76.
- Taylor, S.E., & Aspinwall, L.G. 1996 Mediating and moderating processes in psychosocial stress: Appraisal, coping, resistance, and vulnerability. In H.B.Kaplan (Ed.), *Psychosocial stress : Perspectives on structure, theory, life-course, and methods*. Pp.71—110.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21—28.
- 和田 実 1991 対人的有能性とソーシャルサポートの関連：対人的に有能な者はソーシャルサポートを得やすいか？ 東京学芸大学紀要(第1部門)教育科学, **42**, 183—195.

## 付 記

本論文の作成にあたりご指導下さった名古屋大学教育学部吉田俊和先生、ならびに本論文の調査にご協力下さった名古屋大学情報文化学部長田雅喜先生(現 愛知学院大学情報社会政策学部)に心よりお礼申し上げます。なお本研究の一部は、文部省科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による援助を受けている。

(1998.1.19 受稿, '99.11.8 受理)



## *Interpersonal Stress Events, Social Skills, and Interpersonal Strategies in Undergraduate Students*

TAKESHI HASHIMOTO (RESEARCH FELLOW OF THE JAPAN SOCIETY FOR THE PROMOTION OF SCIENCE, SCHOOL OF EDUCATION, NAGOYA UNIVERSITY) *JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY*, 2000, 48, 94-102

Negative effects of interpersonal relation on mental health are considered to be critical issues in education. The purposes of the present study were to examine : (1) the relation between social skills and interpersonal stress events (interpersonal interactions as stressors) ; (2) the relation between interpersonal strategies (types of commitment toward others) and interpersonal stress events ; and (3) the relation between interpersonal strategies and social skills. Undergraduates (105 males, 95 females) completed a questionnaire. Analyses showed that : (1) the hypothesis that social skills correlate positively with interpersonal dislocation was not supported, although the hypothesis that social skills correlate negatively with interpersonal inferiority complex was supported ; (2) social skills sometimes moderated mental health directly, but the buffering hypothesis was not supported ; (3) self-insight had negative effects on interpersonal stress events ; and (4) the tendency to avoid developing relationships was negatively associated with social skills. Further directions for research in this area were discussed.

Key Words : interpersonal stress events, social skills, interpersonal strategies, mental health, undergraduate students